

不登校の子どもをもつ親の親役割認識の変化

Change in parent role cognition of the Parents whose children non-attendant at school

布施 香織 (Kaori Fuse) 指導：菅野 純

【問題と目的】

最新の文部科学省の学校基本調査(2007)によると、2006年度の不登校児童生徒数は、12万6764人である。中学校でいえば、35人に一人、すなわちクラスに約1人は不登校生徒がいるという状況に変化は見られていない。現在、不登校問題は今日の日本の学校教育が直面する重大な課題であり、深刻な社会問題である。また、学校教育を基盤とし、そこに依存した子育てが一般的な家族にとっても、不登校は大きな苦しみとなって現れている。

不登校の研究では、不登校と親との関係に焦点を当てたものが主流であった。その中で、不登校の子どもをもつ親への援助を視野に入れた研究が重要視されてきている(野瀬、2001、鈴木、2000など)。親の心理的变化、親子関係や家族関係の変化が子どもの心理的变化、不登校状態の改善に大きく影響することが指摘されており、親自身の心理的安定をはかることが臨床の場面でも非常に有効であると考えられる。

子どもの不登校という状況におかれた親の心理ストレスの軽減や家族への援助は、相談機関において不登校を経験している本人への支援と並び重要なものとなっている。親の心理的变化が子どもの変化に影響を与えるということからも、親の心理的变化を促す要因について把握することは、臨床的にも意義があると言える。

どのような変化過程を経て親が子どもの不登校を受け入れるかについては、小野(1993)が自身の関わる親の会のグループ・アプローチから知見を得、I. 不安・混乱期、II. 責任回避期、III. 模索期、IV. 解決方向探索期、V. 方法探索期、VI. 変化期、VII. 問題の積極的受容期、VIII. 親自身の成長期の8段階があると仮説を立てている。その中で、III期からIV期への移行が、他のどの段階における移行より困難であると指摘している。これは、親への心理的支援と代替の価値観とその安全性の見本が示されなければならないためであり、小野はこれを「価値観と生きる姿勢の交換の困難」と呼んだ(小野、1993)。

不登校に関してさまざまな角度から多くの研究がなされている中で、不登校が、親の意識にも大きな影響を与え、子どもの不登校が終了した後も、親の心に自信喪失や不安という形での影響を与え続ける可能性について明らかにした

研究はない。また、従来の研究では、当事者の声を質的に研究した変化過程の研究が少ないことも指摘される。さらに、親の変化と子どもの不登校状態が、どのように関連しているのかについて、明らかになっていない。

本研究は、不登校の子どもをもつ母親の親役割認識の変化に焦点を当てた研究である。この親役割認識の変化という視点は、従来の不登校の親に関する研究には、見られなかったものであり、親や臨床場面で不登校ケースに取り組んいく中から生まれ出た視点である。研究1でグループインタビューを行い、親役割認識の変化を質的なデータから明らかにすることを目的としている。研究2では、個別インタビューを行い、親役割認識の変化における、促進・停滞・後退要因を明らかにすることを目的としている。

【研究1】

子どもの不登校を経験する中での、親役割の認識変化と、変化のきっかけ、要因について、グループインタビュー法を用いて、把握を試みた。また、研究2で行われる、不登校の経験をもつ子どもの親の、親役割認識の変化についての個別インタビューの質問項目の設定と、その妥当性を検討することを目的とする。

対象：不登校の経験をもつ子どもの親 4名 (A~D)

方法：フォーカス・グループ・インタビュー

本研究で質的な調査方法を採用するのは、親の変化過程が、前進・後退・停滞を繰り返しながら複雑な動きをするために、質問紙法などの量的手法で測定するだけでは捉えきれないと考えるからである。

結果：①- i 「子どもが不登校になった時に感じたこと」①- ii 「不登校以前の子育て不安」②- i 「子どもの不登校のために、自分なりに動いたこと」②- ii 「非協力的な他者への怒り」③- i 「初期の親の行動に対する子どもの反応」③- ii 「親子関係の葛藤と修復の努力」④ 「親自身の心の安定を得る」⑤ 「親自身の考え方や行動の変化」⑥ 「親子関係や夫婦関係の変化」⑦ 「子どもの変化」⑧ 「不登校の受容」という親の役割認識変化におけるテーマが抽出された。

また、これらのテーマが同時に現れる場面が多く、変化の過程が必ずしも一方向に順番に進まず、繰り返しや後戻

りを繰り返しながら体験されることが示唆された。さらに、「親自身の心の安定を得る」というテーマが、親の親役割意識の変化を促す上で、重要なテーマとなっていることが示された。

【研究2】

子どもの不登校を経験した親の親役割認識の変化と子どもの変化の関連、変化のきっかけ、要因について、個別インタビューを用いて探索的な研究を行った。ここでは、母親が親役割についての認識の変化が、8つのテーマを中心に語られることが明らかになった。研究②では、子どもが不登校になった時期、親自身が関わっているサポート源、現在の子どもの状態、親の変化と子どもの変化の連動性を照合し、さらに詳細な親役割認識の変化過程を明らかにしていく。調査の方法としては、より深く考察するため、個別のインタビュー調査を採用する。

対象：不登校の経験をもつ子どもの親（10名程度）

方法：個別の半構造化面接

ここで個別の面接法を用いるのは、親自身による語りを知ることによって、より当事者である親の視点から、親役

割認識の変化と子どもの変化について捉えることを目的としているからである。また、子どもの不登校が始まった時期と現在の状態、親が関わっている相談機関やサポート機関などについての質問も行った。研究1で明らかになった親役割認識変化のテーマと照合し、考察をしていった。

結果：研究1で明らかになった親役割認識の変化のテーマが、個別インタビューに参加した母親においても、ほぼ同様に体験されていることが明らかになった。

【考察】

本研究では、不登校の子どもをもつ親の親役割認識という視点から、子どもが不登校になってから不登校の受容が行われるまでの変化について研究を行った。ここでは、親自身が認められ、受容される体験が、その後の変化を促す鍵となることが認められた。不登校当初に強く認識されていた親役割が、「親」としての自分ではなく、「私」という自分として受容されるためと考えられる。また、研究2では、親役割認識変化の過程における促進・停滞・後退要因が明らかになった。これにより、臨床場面の親の支援において、親の親役割認識という生涯発達の視点を組み入れることが有効であることが示唆された。